

## 「タックスヘイブンの闇:世界の富は盗まれている！」

ニコラス・シャクソン(著)、藤井清美(訳)

朝日新聞出版 2012年2月29日刊

ヨーロッパの金融・財政危機がなかなか終息しそうもない。米国や日本の政府債務も拡大の一方であり、先進国のいくつかが財政破綻に陥る可能性が完全には排除できない状況にある。

そもそも毎年財政赤字を出しているということは、政府支出が税収を上回っているということであり、それは、①税が不十分にしか徴収されていない、②支出が不必要に高く、無駄が多い、③税は適切に徴収されているのだが、高齢化や景気の悪化で政府支出が拡大しており、増税が必要である、という3つの可能性があることを意味している。そのうち、先進国政府は②について多少の配慮をしつつ、③が財政赤字の最大の理由であり、増税もやむなしというスタンスを取っている。

本書は、①に関して、世界規模で徴税当局の手の届かないタックスヘイブンに資金が逃げ込むことによって、本来払われるべき税金が徴収されていない実態を広範かつ詳細に追ったルポである。

タックスヘイブンというと、一部の多国籍企業が租税回避の目的で利用している、南海の小国であり、大半の経済取引はそれとは無関係なものであると考えられているかもしれないが、本書によれば、世界の貿易取引の半分以上が、少なくとも書類上はタックスヘイブンを経由している。また、すべての銀行取引の半分以上、多国籍企業の海外直接投資の3分の1がオフショア市場経由で送金されている。世界の徴税当局が失っている税収は相当な額に上るはずである。

本書では、英国が海外植民地を失っていく代償に、オフショア市場、タックスヘイブンを創設し、世界中から資金を集め、自らは脱法行為に直接手を出さないで、最終的にシティに資金が還流してくる方法を構築してきた経緯を詳しく論じている。

これまで、どうして米国はたびたびバブルが崩壊しても、すぐに市場が回復してきたのか、どうして、米国や英国には途上国からの資金が逆流してくるのか、あるいは日本に資金がなかなか入ってこないのはなぜか、ということを考える上で、重要なヒントを与えてくれる一冊である。